広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	言語機能と感情現象との離反と接触 ： うそとつじつまをめぐって
Author(s)	上原，輝男
Citation	児童の言語生態研究 , 5 : 32 - 35
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045057
Right	
Relation	

言語機能と感情現象との離反と接触

――うそとつじつまをめぐって――

上原輝男

一、

子どもたちの成長過程において、「うそをついてはいけない。－いけないんだ！－いけないんだよね⁈－いけなくないの⁈－うそをついていいのか⁈－」などという子どもの中には、少くとも迷いがある。「ほら、虫だぞ。うそだよ。」一々うそと断わらなくともと思うこんなことばにも、「うそ」にとらわれている何かがある。その「うそ」もいつしか語呂あわせ・冗談・からかい・洒落・頓智・機智・等々も口に出して行くようになる。それらは全く試行錯誤の中に、それらに表出されるべき感情のパターンをみずからに固定して行くと言ってよい。

結果的には感情のパターン化と言えるが、その過程は、ことばの介在において動揺・反応する感情現象そのものであり、実は大人になっても、「うそ」は本来生起的現象的なものであって、結果的なものではない。

ことばの介在による動揺・反応する感情現象は、何も「うそ」に限らないけれども、特に「うそ」に関する感情現象は大きい。それだけに、ことばの働きと、その感情現象との関係が緊急であり、目的々である。ために、その関係が把えられなかったり、弛緩したりその目的性を気づかなかったりすると、何の変化・動揺ももたらされない。このことは「うそ」が、「うそつき」・「うそをつかれる」の被我関係が常に一定しているとは限らないという特殊な言語行為であることに思い到る。つまり反応・動揺する感情現象を緊急目的とする知的言語行為には、それだけの知的な仕組みがあるから、それに反応するには、それだけに、反応者も知的でなければ、反応は起らない。勿論、反応が起らないことを見て、「うそをついた者は、ある意味での反応として成功を思う場合もあるが、一般的には、「うそ」をつかれた者が、「うそ」をつかれたと思わない限り、どちらが「うそ」をつかれたことになるか知れたものではない。

ではやはり、結果的にしか「うそ」が成立したかどうかはわからないではないかということになると思われるが、このことは、「うそをつく」ことの言語行為そのものではない。「うそをつく」ことは可能性にお

ける言語行為であり、可能性であることにおいて、以前に可能であり得るとするなんらかの言語機能の仕組みを知っている経験を必要とする。

うそをつかれる側にしても同じことで、以前にうそをつかれた何らかの経験なしでは、うそをつかれることは起らない。「始めてうそをつかれた」などというが、ここで述べている論でいえば、それは「うそ」であって、その言語行為の可能性を認める何らかの言語経験の持ち合せが既にあったことを意味している。

但し、うそをつかれた経験といっても、大人にとってもこれを言語機能の仕組みにおいて解明することはそれほど簡単なことではない。けれども、これを感情現象としてならば、詳細に何の苦もなく描写するだろう。先に述べた通り、感情現象が緊急であり、目的々におけるそれであることを直観しているからに外ならない。別のことばでいえば、ある種の自己の感情パターンを写すことが、うそをつかれた経験だと思っているのである。たとえば、「もうくやしくってくやしくってたまらぬ」などというそれである。

「うそ」におどる感情現象が、もし人間にないとするなら、「うそ」などは、言使用の誤り、聞きまちがい、誤まった読み方、錯覚あるいは狂いなどということでそれ以上ではない。

ところが、「うそ」には「たぶらかし」の作用があると一般的にはきめてかかっている。きめてかかっていること自体、「うそ」が感情現象を条件とした言語機能であるとしていることになる。

その言語機能を全て集中的に相手の感情現象の混乱、動揺に注ぐときのことを「だます」という。この場合言語機能と感情現象の混乱と動揺は殆んど一つに思われている。もしそうでなかったら、「だます」というような憎悪・罪悪的な語感をわれわれは持ち合わさなかったろう。人はだまされ易い。まただまされることによって口惜しく、腹立たしさを思うように育てられて来ている。もちろん、人間種族にとって、それが、どうしようもない感情現象であるところから、これに対する対策として、言語習得時代から言語使用上のタブーを言い渡す。言うまでもなく、「うそはいけない。わるい」等々の躾である。人間の感情現象の平和維持のための必死の防禦策であり、警戒態勢なのであろう。

二、

いま、筆者は道徳教育の脆さやその発生について述べているつもりはない。これをそれとは別に考えねばならぬ。しかし本来別々に考えねばならぬことであるから、「うそ」の言語機能の領域も制限されたり侵犯されたりしたままの言語生活や環境が自然なものだとは思えない。「うそ」の言語機能を手離しにしたところで、それと反応する感情現象それ自身を更に見届ける目を持つことだって、人間にはできる。いわば、感情現象そのものを冷やすことだって、不可能ではないのである。

感情現象が冷えて来るとどうなるのか。感情現象に届きかねたというか、目的に行きつかぬことばの最突端の喘ぎが見えるはずである。つまり、感情の動きと一つになり切れなかったことばが、その淡い航跡だけを示すようなものである。それは、もはや観念的な図式でしかない。もとより無時間的であって、働きは、その作用性を思うことにおいてのみ感じられる。語呂あわせ・冗談・からかい・洒落・頓智・機智・これらのいずれもは、軽妙であることをもって可とする。これらには知的要因が含まれていることは誰しも認めるところであろう。いわゆるこれらの知恵を誰しも重く感じたり、これらの知恵に時間を認めたりはしないのも、これらがことばの図式だと思っていることと関係がある。

もちろん、ことばの図式といえども、ことばが図式をつくる限り、完全に感情現象と絶縁し切らない。両者が間隔をおいた関係であることは失われない。だから、語呂あわせ・冗談・からかい・洒落・頓智・機智が、感情現象の方から見れば、感情現象全てをゆさぶるものとはならず、その一部にしか反応しない。だから一種のくすぐりであるともいうのである。感情現象に届き切らぬから、余裕をもって、そのことばの図式と、その図式の作用性を見破ったり、甘受したりしていうのである。だから、これらに軽さを思うのにちがいない。しかもこれらは明るくなければならない。先に航跡と譬えたのも、そのことばの図式が明瞭さ明解さを持っていると思うからである。しかし、決してそれは目的ではない。むしろ感情現象を起す側に余裕があるために、そのことばの図式を見届ける明るさなの

である。軽さがもし余裕の故に言われるのだとしたら、明るさも、既にその時生じているのかもしれない。但し、ことばの図式の軽さが、単純簡単さをいうとすれば、明るさは、ことばの図式の簡単さとは別につじつまの明解さを条件的に伴っている。

「つじ」（辻）が他者との交叉を意味しており、「つま」（妻・褄）は部分が全体との関係における所在を示しているにちがいない。つまり、つじつまは論理に外ならない。しかもつじ（辻）がすじ（筋）において伴うように、つま（妻・褄）は本体に随うものとして、附随的、あるいは一面性として把握されている。では本体とか筋とかは何であるのか、おそらく、感情を主にしているのであろう。考えてみれば、われわれ人間にとっての言語を、われわれは知的所産とばかり考える習性から、ことばの図式性ばかりに注目させられて来たが、ことばの母胎が、われわれの感情現象から発するものであることを思わないことの方が不思議であった。

ところが、つじつまの語に本体とは別にした附随的末梢的印象を思うのは、まだまだ意識の底では、感情現象を先行させるものが残っているのであろう。だから感情現象が直観的であるのに較べて、つじつまは、立止り、改めて顧みるふうなのもこのことの記憶と伝承があるからだと思う。

このように、言語によることばの図式性とことばにまつわる感情現象を区別して考えてみたのであるが、話を戻して、うそに関係のある言語事象に限ってみると、この両者は、特に、相関的である。その相関性は仮りに一方が相手の感情現象を目的としない ― つまりうそをついていない場合においても、聞き手が自分の感情現象を話し手のことばの図式との関係において聞くならば、うそだと思う場合が起り得る。全く逆も起り得る。だから、その相関性というのは、うそをつく者、つかれる者が、一方はことばの図式を、他方はそれによる感情現象というより、それ以前の各自におけることばと図式とその感情現象との相関において成立するものだと考えられる。

三、

ただ一つ右の考えに異が称えられそうに思われるものに人情論というのがある。

人情論とは何であろう。人間感情を尊重する立場を崩さず、むしろそれによって論の筋道を立てることをいうのであろうか。もし仮りにそうだとすると、論の筋道を立てるというより、その筋道は人間感情の在るべき掟てが既に定まっているのであって、論というには実に遠い。筋はあってもここにはつじつまは必要としないものである。いわゆる昔人の義理といったそれである。確かに、もしこの義理がことばの図式 ― 理屈に破れるとき、この義理を守るために論陣が張れたら、それをこそ人情論と呼び得るかもしれないと思うまでである。

過日も、国連における日本の人情論敗れるの報道がなされた。議論と人情論 ― 筆者は妙な気持にさせられた。人情論は既に防禦の論でしかない。論というよりたてまえでしかあり得ない。ことばの図式を重ねて更に新しいことばの図式を得るのを議論とするなら、人情論はそれに抗するための防波提でしかない。

しかし、ここで述べたいことは論としてのその優劣を言おうがためではない。もし、人情論の劣勢を笑う人があるとするなら、議論好きな人が言い勝った時、その空しさを知ることの出来ぬ不感症さもまた笑われて然るべきなのである。

感情と言語との相関は、方法的には両者が切り離されたとしても、またしてもいつかよみがえるが如くに接触し始めるものであって、方法的に分離させてみるだけのことなのかもしれない。人情論も分離の故に却って離反消去されるものを引き留め拾い上げるためにするものであったかもしれない。またそれとは逆に、ことばの図式だけを考えてみるのも、それは、感情にほんのわずかの間の無理な停止であって、ことばの図式化が終るか終らないかで、どっと流れ込んで来る感情の動きをわれわれは知らないわけではなかった。

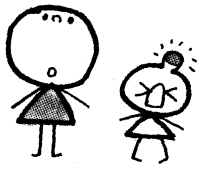
数年前の放送番組「子どもの電話室」と題する子どもたちの自由な質問の中に、「ウソをつく」と「ホラをふく」とどう違うのかというのがあった。誠に、素晴しい質問だと感心させられたのであった。これほどまでに鋭い感受性が育っている子どもをわれわれの国語科教育は本当に大事に育てているかどうか、それを受け容れるだけの環境とカリキュラムを用意しているかどうか、はなはだ心もとない限りである。この子が

特に素晴しいというより、自然に育っておれば、だれしも感覚的用語の多い日本語にあっては、こうした疑問にぶつからぬことの方が何かのまちがいなのであって、これは素直な言語成長の過程だと考える。先述して来たことばをことばの図式と、それに伴う感情現象とで考えるということである。そして、この両者関係に矛盾があるのを感じて了うのである。

この質問の疑問は幾つから起きているのであろう。「ウソをつく」と「ホラをふく」とは結果的には同じではないかとする疑問、即ち、「ホラをふく」のもウソをついていることではないか。にもかかわらず、ウソをついていても、ホラをふいたわけではないことがあるのはどうしてか。つまり、AはBであるのに、BはAではないとする矛盾がある。まだ他の疑問もあるかもしれない。AはBであるのにBはAではない理由は片方が「つく」のに一方は「ふく」、この違いを考えるかもしれない。だとしたらなぜウソはつき、ホラはふかれなければならぬのか、とする疑問、ウソをふき、ホラをつくと言ったとしても、うそに関する発言においては変らないから、それほど重大過失とは思えないとする疑問等々と推察してみる。

世のおとなたちは「ホラをふく」が譬えであることから解答して行くであろう。しかし「ホラをふく」が誇大であることにおいて事実と反するから、「ウソ」に包括されるというところまでの説明はやさしい。ウソに包括されるからといって、「ホラをふく」と「ウソをつく」と同じとして了っては、子どもの疑問を正当化して了っただけで、実は子どもが疑問を起している原因の解明には立ち入れないから、「ねえ、やっぱりおとうさん、おかあさんも、おかしいと思うでしょう」などと子どもに同意を強いられないともかぎらない。

「ウソをつく」と「うそをいう」と今日では何の区別の意識もなしに使っているけれども、本来、区別のあったものであろう。「ホラをふく」が「うそをいう」ことの一形式という説明は可能であるところから、直ちに「ホラをふく」＝「ウソをつく」と、「うそをいう」と「ウソをつく」とを入れかえてみて起きる不満足さから起きて来る疑問だと思う。何故「ウソをつく」と「うそをいう」とは、全く同じとはできないのであろうか。おそらく、「ウソをつく」にわれわれは相手の虚を衝くの言語行為とその印象のかすかな記憶を残しているにちがいない。もし「ウソをつく」をそのような意味において感じとっているとするならば、「ウソをつく」は「うそをいう」とは意識構造において明らかに隔たりのあるものと言わねばならない。ましてや「ウソをつく」と「ホラをふく」とにおいては、その言語使用の構えと方法は対照的でさえあるといえる。

相手の虚を衝くことの意識のない虚言などは本来児戯に等しく、また本来そのようなことは起り得ない。つまり「ウソをつく」ことはあり得ても、相手の感情現象を無視してそれと関係なく、うそをいうことはあり得ないことになる。結果的判定においてのみ、「うそをいった」とする場合があるだけのことである。またその場合においても、相手の虚を衝き得たか、または、つき得なかったとしても、それを直接間接において目的としたか否かとの関係において問うているのである。

今日の国語科学習は、ことばの実の面だけの学習だといえる。そしてそれは、言語機能は感情現象の接触と離反の運動であるからには、実の面だけでは偏向だといわれねばならぬ。ことばの虚の面をとり入れてこそ、言語学習は人間教育とも重なり、正常普遍となることに思い到らなければならない。